

第3章 わかやまの自然と生活



山深い熊野川の生活



熊野の山と森林

熊野川は、わが国の代表的な多雨地帯である大台ヶ原や大峰山脈を源とする北山川と十津川が合流し、新宮市で太平洋に流れこんでいます。

1年間に4,000mmも雨が降る熊野の山地は豊かな森林を作っています。

大峰山脈の海拔1,500m以上は、シラビソやトウヒなどの亜高山性の常緑樹林、1,000mから1,500mの大台ヶ原には、ブナ林の温帯性落葉広葉樹林、玉置山(奈良県1,076m)の1,000m以下は、ウラジロガシやアラカシなどの暖帯性常緑広葉樹林となっていて、山地の高さによって樹木の種類が違ってきます。また暖かい黒潮の影響もあり、那智原始林や熊野灘の海岸には、ウバメガシが群がり生えているところがみられます。

和歌山県・奈良県・三重県の3県にまたがる熊野川流域の森林面積は12万7,000haで、流域面積の約94%を占めています。



紅葉する熊野の山々

熊野材(紀州材)と水運

熊野材は、紀ノ川上流の吉野材とともに紀伊山地を代表する木材で、新宮市はその集散地として栄えました。



北山川の観光筏下り(北山村)

明治時代には、おもにモミ・ツガなどの天然林が切り出され、大正時代からはその切り出されたあとにスギ・ヒノキが植えられました。第二次世界大戦後は天然林が少なくなり、今ではほとんどが、スギ・ヒノキの人工林になりました。

切り出された木材は、おもに板や丸太に製材されて建築材料などに使われますが、その他にも割り箸に加工されたり、細かな木くず(チップ)にされて紙の原料になります。

第二次世界大戦後、阪神工業地帯に電力を送



熊野川のジェット船（新宮市）

ることや、たびたび起こる水害を防ぐためにダム
の建設がはじまりました。これにあわせて、ダム
建設資材の運搬や、筏にかわる輸送手段として、
道路が整備されていきました。そのため、筏流し
は少しずつトラック輸送に代わり、1963（昭和
38）年3月、熊野川支流の北山川を最後に筏流
しは姿を消してしまいました。しかし、1979年
に観光用としての筏下りが北山村で復活し、今で
は観光客でにぎわっています。

人や物に乗せて熊野川を行き来したのは「団平
船」とよばれる木造船でしたが、それにかわって

登場したのがプロペラ船でした。スクリューをつけた船にすると、水深の浅いところでは川底につかえる
ため、船の後ろにプロペラを取りつけて、それを回して進む船が、1918（大正7）年に考えだされまし
た。これを発明した鳥居丈之助は、その前の年に、アメリカ人の飛行士アート・スミスが新宮の河原で曲
芸飛行をしたのを見てヒントを得たといえます。「団平船」では、新宮から本宮まで上るのに2日以上かか
りましたが、プロペラ船では3時間半で行けるようになりました。そして1965年には、より静かで、速い
ジェット船が運航するようになり、今も瀨峡観光船として活躍しています。

熊野川流域の特産物

熊野川流域には、豊かな自然にはぐくまれた、いろいろな特産物
があります。熊野地方によく見かけるのが、「めはり寿司」と「さ
んま寿司」です。めはり寿司は、大きなおにぎりを、よく漬かった
高菜で巻いて作ります。もとは山で働く人々のお弁当で、あまりに
大きいので、食べるときに大きく口を開けて目をはるところから、
この名がついたともいわれています。今は、秋祭りや正月の料理と
してよく作られます。



たかなで巻くめはり寿司

また、茶の栽培も盛んです。茶は、気温が高く、雨や霧が多くて水はけのよい土地を好みます。田辺市
本宮町の三里や請川で生産される音無茶や、那智勝浦町色川の色川茶などが有名です。

豊かな木材を利用して田辺市本宮町皆地では、ヒノキで編んだ手作りの皆地笠が作られています。この
笠は、屋外の作業に欠かせないものであっただけでなく、熊野三山へ参詣する人々により、日よけや雨よ
けとして使われてきた歴史があります。しかし、作れる人が高齢となったり、材料となる樹齢60年以上の
良質のヒノキも少なくなってしまうたりして、今は継ぐ人がいなくなっています。田辺市本宮町では、イ
チゴや花の促成栽培が行われ、土地でとれるシソをしぼったジュースは特産品となっています。また、「熊
野牛」の飼育も行われています。「熊野牛」は、昔からこの地方で飼育されていた和牛です。

全国でただ1つの飛び地の村である北山村では、ジャバラが特産品になっています。ジャバラはミカン
やユズと同じ柑橘類ですが、ユズに比べて倍の量の果汁を含んでいます。村は65才以上の高齢者が約45%
を占めていますが、ジャバラからつくったジュース・酒・せっけんなどを販売し地域の生活にうるおいを
与えています。